

四国地区におけるクレチン症マス・スクリーニングの 現況とその問題点

宮尾 益英，白川 悦久
(徳島大小児科)

研究目的

四国地区におけるクレチン症マス・スクリーニングの実施状況を把握・分析し、各県の要精検者の管理における問題点を明確にし、さらにそれらの解決方法を検討すること。

研究方法

四国各県のクレチン症マス・スクリーニング陽性者の通知責任者に一次調査を行い、この調査結果に基づいて要精検者の管理状況の具体的な内容を知る目的で、それぞれの管理病院に対してアンケートによる二次調査を行った。

研究結果

愛媛県と高知県では昭和55年10月1日より、香川県では昭和56年3月16日より、また、徳島県では昭和56年4月1日よりクレチン症マス・スクリーニングが開始された。一次調査で集計された時点(昭和59年9月ないし11月)のスクリーニング総数は212,355名であり、判明している要精検者は37名、クレチン症患者は16名(男児5名、女児11名)であった(表1)。

表1 四国地区におけるクレチン症マス・スクリーニングの実施状況
(昭和55年10月から昭和59年9～11月まで)

Prefecture	Year	Number of		
		Screenings	Hyperthyrotropinemia	Cretinism
Ehime	Oct.1980 - Mar.1981	10018	1	
	Apr.1981 - Mar.1982	20851	5	(1)
	Apr.1982 - Mar.1983	20500	5	(2)
	Apr.1983 - Mar.1984	20365	4	
	Apr.1984 - Nov.1984	14140	3	
Kochi	Oct.1980 - Mar.1981	4900	0	0
	Apr.1981 - Mar.1982	9813	3	2
	Apr.1982 - Mar.1983	10173	0	0
	Apr.1983 - Mar.1984	10055	3	1
	Apr.1984 - Oct.1984	5826	5	2
Kagawa	Mar.1981 - Mar.1981	553		0
	Apr.1981 - Mar.1982	12440		1
	Apr.1982 - Mar.1983	13123		0
	Apr.1983 - Mar.1984	13092		2
	Apr.1984 - Nov.1984	8595		1
Tokushima	Apr.1981 - Mar.1982	10788	2	1
	Apr.1982 - Mar.1983	10798	2	1
	Apr.1983 - Mar.1984	10959	2	1
	Apr.1984 - Sep.1984	5366	2	1
T o t a l		212355	37	13 + (3)

表2に四国各県のクレチン症マス・スクリーニングの要精検者における問題点を示した。

表2 四国各県のクレチン症マス・スクリーニングの要精検者管理における問題点

管理における問題点		
徳島県	M. Y. (56. 9. 19.)	徳島大学小児科→昭 58. 12. 新潟大学小児科
	M. T. (58. 3. 3.)	母親 昭 59. 9. 第2子出生
	M. T. (58. 12. 29.)	徳島大学小児科→昭 59. 2. 名古屋大学小児科
	S. N. (59. 9. 23.)	徳島大学小児科→昭 59. 10. 埼玉県立小児医療センター
香川県	E. F. (59. 10. 17.)	香川小児病院→昭 59. 10. 大阪大学小児科 クレチン症4名以外の要精検者の管理状況の詳細不明
	K. M. (56. 9. 18.)	生後11ヶ月 TSH 132 μ U/ml, T ₄ 5.8 μ g/dl 1才4ヶ月 TSH 193 , T ₄ 7.0 クレチン症(異所性) 長期間無治療
高知県	T. S. (56. 10. 8.)	担当医の交代で一時期無治療 クレチン症(異所性)
	M. Y. (59. 10. 11.)	生後19日 TSH 113 μ U/ml, T ₄ 15.1 μ g/dl T ₁ Hと判断し、I-T ₄ 20 μ g/dayを中止予定。
愛媛県	昭和57年度以降の要精検者の管理状況の詳細不明 (県担当者より産婦人科に要精検を通知するシステム)	

徳島県ではMY例が父親の転勤で新潟県長岡市へ、3番目のMT例、4番目のSN例は里帰り分娩で徳島へ帰省し、現在は名古屋市の、埼玉県春日部市へ転居していた。また、2番目のMT例は母親が昭和59年9月に第2子を出生し、十分な検査が施行されていなかった。

香川県でもEF例は里帰り分娩で香川に帰省し、現在は大阪府に転居していた。アンケート調査に対する県担当者の報告にはクレチン症と判明している4名のみ記載であり、他の要精検者の連絡、および経過などの管理における現状の把握ができていなかった。

高知県は県衛生研究所におけるスクリーニング陽性者の把握は十分になされていたが、各管理病院における追跡管理にいくつか問題点がみられた。具体的には、KM例は1歳6ヶ月まで無治療で経過観察され、TS例は担当医の交代により約1年半治療が中断されていた。また、MY例はT₁Hとして甲状腺ホルモン剤の投与中止予定とされていた。

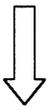
愛媛県では要精検者に対して県担当者が出生した各病院の産婦人科に通知するシステムであるが、以後の管理病院の把握がなされていなかった。愛媛県下の管理病院になっていると考えられる各病院小児科に二次調査を行ったが、要精検者の追跡管理状況に対する報告がほとんど届いておらず、特に昭和57年以降の要精検者の管理状況の詳細は不明であった。

考 案

今回の実態調査で四国各県における諸事情により、要精検者の管理の不十分な現況がうかがわれた。要精検者に対して、各県担当の係からの通知、それにひき続く管理病院の把握、また各々の管理病院での要精検者に対する指導も含めた、適切な追跡管理が十分に行われることが大切である。今後、各県担当者、管理病院と緊密な連絡をとりながら、各県の事情、方針にあわせたシステム作りを検討し、さらに指導していく必要がある。



検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用
論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



研究目的

四国地区におけるクレチン症マス・スクリーニングの実施状況を把握・分析し、各県の要精
検者の管理における問題点を明確にし、さらにそれらの解決方法を検討すること。